黒佐和義博士を偲んで

渡辺泰明
〒 194–0043　東京都町田市成瀬台 2–26–33

私が種々の都合で「虫屋」の会合から遠ざかっていたために，黒佐和義博士が逝去されたことを知ったのは本誌 33 号に掲載された保科英人博士の追悼文によってである．私にとっては突然の訃報で，驚きと共に黒佐和義博士（以下黒佐さんと呼ばせていただく）から色々な面でお世話になった事を思い出し悲しみに沈んだ．

私と黒佐さんとの接点は，1962 年に黒佐さんが当時東京農業大学大学院の指導教授として在職されていた八木誠政博士に積年の研究成果を，「日本産歩行虫類の生態と幼虫の分類に関する研究」として提出し，農学博士の学位を授与されたことが契機で，以後親しくご厚誼していただく様になったと記憶している．

近年は黒佐さんにお会いする機会が無かったが，最後にお会いしたのは 5 年程前？に目黒の国立科学博物館付属自然教育園で行われた本学会東京例会の席上である．この時，会場で私の姿を見て近付いてこられた黒佐さんが，開口一番「まだ生きているよ！」と言われた言葉が印象強く脳裏に焼き付いている．

思えば，私か日本昆虫学会関東支部の「使い走り」をしていた頃から黒佐さんには随分とお世話になった．日本昆虫学会関東支部が千葉大学から東京農業大学（以下東京農大と略記）に移転した後も，行事日程は従来通り「関東支部例会」が年に 6 回隔月に実施され，最後の例会は会員の研究成果を発表する大会として開催された．この大会が 1961 年以降毎年実行されて，第 1 回大会（1961）で黒佐さんは「ツシマカブリモドキの生活史」について講演されたのを皮切りに，その後第 5 回大会 (1966) 迄の 6 年間は，毎回甲虫類に関する研究成果を講演された．これらの内容は，ハンミョウ，ゴミムシそれにシデムシ等地表性甲虫類に関する主として生態的知見を，また第 7 回大会（1969）では流れに棲むクシヒゲナガハナノミ幼虫に寄生するヒメバチについて興味深い観察結果を報告された．第 6 回（1968）と第 10 回（1972）から第 22 回（1984）迄の大会では，主として甲虫類に寄生するダニに関する事項等広範囲の分野に亘って興味ある研究成果を発表されている．

一方，私の研究と直接係わりのあるハネカクシ科に関しては，アオバアリガタハネカクシの生活史を克明に調べ上げて，卵および各ステージごとの幼虫並びに蛹に関する形態学的および生態学的研究成果に加えて，人体におよぼす皮膚炎の発生機構等広範囲の分野にわたった内容について報告されている．

この様に，黒佐さんは昆虫ばかりでなく昆虫と係わりのあるダニ等について多様な研究内容を発表された．その上，黒佐さんは若い人達の研究内容を聞いては，それらに関する文献やご自身の経験等に基づいた適確なアドバイスをされて，若い人達の研究が一層深められる様指導的な役割を果たされていた．この様に，黒佐さんは主に甲虫や蜂類の生態や昆虫に寄生するダニ等に関する多様な研究で日本国内において貴重な役割を果たしてこられた．しかし，今後は学識・経験豊かな黒佐さんからの適確な助言や指導が得られなくなった事は何とも残念な極みである．

私は黒佐さんと最後にお会いした時に声をかけてくださった「まだ生きているよ！」の言葉を反芻することで，黒佐さんが今後も私の心の中に生き続けてゆくことと思っている．

写真．2002 年 4 月 20 日，新宿京王プラザホテルにて．左：黒佐和義博士．